

夢追人

やろうとする気構え、
それに努力を継続させることが
大事だと思います。

古川七三人さん (大川市向島)



乾漆の技術をほぼ独学で身につけてきた古川さんの言葉には説得力がある。その技術は高く、華胥の夢博(クラフト部門)では過去2回最高賞を獲得している。日展、日本新工芸展などの受賞歴もある。

乾漆との出会いは以前所属していた会社でのことであった。漆に傾倒していた社長が日田からアドバイザーを呼び、社員に研修を施したのだ。その後、漆をあつかう別会社へ移り、本格的に取り組むことになる。仕事後、自宅ですべて2〜4時間漆の研究に取り組んだ。約10年間日曜日も休まず続けたそうだ。もちろん独立した今も続けている。

乾漆をする職人は九州では3人くらいで、非常に少ない。従って当然独学ということになる。ではどうして高い技術を習得することができたのだろうか。「生懸命集中して取り組んでいると、ひらめきがあります。その積み重ねですね。根気強く常に考えながら、も

ちろん試行錯誤があります……。どの分野もそうではないでしょうか。何かを身につけるには。」見習える姿勢だ。

独学といっても、日本新工芸研究会には定期的に足を運ぶ。そこにはいろいろな分野の技術者たちが集まる。焼き物や彫刻家など。染色や造形の技を磨く。お互いのきたんのない批評が実に勉強になるそうだ。

乾漆が完成品として仕上がるまでには約1年かかる。麻を芯にして、その上に何度も何度も塗り上げていく。最終的に7〜8ミリの厚さになる。ただその過程で描き出そうとしている色あいが簡単に出るわけではない。また何度もやり直す。古川さんはいく。「自分が感動できない物で他の人を感動させることはできないと思います」。非常に根気のある作業である。

古川さんにはオールラウンダーとしての才能もある。タンス、鏡台、太鼓、オルゴール、茶道具、



演台、それに桐ダンスまで。木に関するモノなら、何でも造るそうだ。

古川さんには学ばさせられる。集中して生懸命、根気強く取り組み、高い技術と感性を身につけられるということ。目標をクリアできるのだ。古川さんの美しい乾漆を見ると、そう実感できる。

